



英語ライティングにおける結束性

倉橋, 佑輔

(Citation)

神戸大学国際コミュニケーションセンター論集, 17:85-110

(Issue Date)

2021-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012587>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012587>



英語ライティングにおける結束性

倉橋 佑輔

神戸大学 国際文化学研究科(大学院生)

概要

本研究は、英語ライティングにおける「結束性(cohesion)」に焦点を当て、日本人大学生が産出する英文において、語と語、句と句、文と文がどのように結びつき、まとまりのあるテキストを作り出しているかを明らかにすることを試みる。英語学習者コーパスの一つである **International Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE)** のエッセイデータを使用し、日本人英語学習者による結束性表現の使用傾向を(1)習熟度の違い、(2)東アジア諸国(中国、台湾、韓国)の学習者との違いの観点から調査した。エッセイの総合スコアを元に上位層と下位層に分け、結束性マーカーの使用傾向を比較したところ、選択する結束表現やその使用頻度に違いは見られなかった。一方、東アジア諸国の学習者との比較では、同じ習熟度であっても、日本人英語学習者よりも他国の学習者の方が結束性表現に多様性があることが観察された。

キーワード

英語ライティング, エッセイ, 結束性, Cohesion

1. はじめに

近年、国内で進められている学習指導要領改訂や大学入試改革によって、これまでよりも「思考力・判断力・表現力」が問われるようになっている。つまり、自分の考えを適切な語彙や文法や談話標識を用いて相手に伝えることのできる高いライティング能力が、これまで以上に求められるようになっていくということである。日常生活においても、正式なものほど「書いて」伝えられることが多い。授業の中で成績評価対象となるのは、通常、レポートや論文など書き言葉を媒介としたジャンルである。仕事の場面においても、「書類の読み書き」で英語が使用されることが最も多く、Eメールやビジネス文書などのジャンルを適切な文体で書けるかどうかは、職業能力の重要な構成要素となっている(アルク, 2020)。金(2017)によれば、昨今、日本企業の中で英語を社内公用語化する動きが拡大しつつあり、英語で書く力を採用や昇格の要件としている企業は、2010年代に入って急増している。背景には、グローバル化が加速する中で、日本企業にとって「世界で戦える人材」の育成と確保という問題が喫緊の課題となっていること(経済産業省, 2012)、加えて、外国人技能実習

生をはじめとする外国人労働者の受け入れ数が急速に増加し、企業でのグローバル化が進んでいることが考えられる。

当然のことながら、英語で書く力の重要性は、国外においてもますます高まっている。World Economic Forum(2016)によれば、英語を話す人々は、現在、世界に約15億人おり、そのうち10億人以上は第二言語として英語を使用している。また、国際連合や世界貿易機関、国際オリンピック委員会等、多くの国際機関において英語が公用語の一つとなっている。このように、英語は「非母語話者同士がコミュニケーションを行う際の共通語、つまりはリンガフランカ」(石川, 2017, p. 223)としても世界中で使用されており、その重要性は、グローバル化が急速に進展する中で、日本人にとってもますます大きくなっている。そのため、中学校や高等学校の教育現場では、英語によるコミュニケーション能力の育成が強く求められるようになり、上述したような教育改革や大学入試改革が実施されるに至ったのである。

しかし、2018年に告示された高等学校学習指導要領の解説外国語編英語編では、高等学校における英語教育の現状について、次のような課題が指摘されている。

高等学校の授業においては、依然として外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が適切に行われていないこと、「やり取り」や「即興性」を意識した言語活動が十分ではないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど複数の領域を結び付けた言語活動が適切に行われていないことといった課題がある(p. 6)。

この指摘は、英語によるコミュニケーションに必要な4技能である「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」の中でも、特にアウトプットの技能である「話すこと」と「書くこと」についての言語活動が、高等学校の英語の授業においては十分には行われていない可能性を示している。

特に「書くこと」についての課題は多い。2017年に実施された全国英語力調査(改定前の学習指導要領で英語授業を受けた中学生(約6万人, 約600校)と高校生(約6万人, 約300校)を対象に実施)のライティングテストでは、受験した中学3年生の53.2%がCEFRのA1レベルに達しておらず、高校3年生全体の80.4%がA1レベルにとどまるという衝撃的な結果が報告された(文部科学省, 2017)。ライティングテストを無回答で提出した無得点者(0点)も、中学3年生で11.0%、高校3年生で15.1%と一定数いたことが報告された。

以上のことから、近年、その重要性がますます高まっているにも関わらず課題が指摘されている「書くこと」について、日本人大学生が高等学校卒業までにどのような英語ライティング指導を受け、その結果としてどの程度英語ライティング能力を身に付けているか調査することは、今後の英語教育を改善するために必要であると考えた。「話すこと」も当然のことながらコミュニケーションを図るためには必要な技能ではあるが、「書くこと」は、「話すこと」のようにジェスチャーや表情、音声、相手の視線などの非言語コミュニケーションツールに依存することはできず、文字と文章だけで、自分の考えや意見を表現しなければならないという点で、「話すこと」にはない難しさと特異性がある。本研

究は、この「書くこと」の難しさと特異性に着目し、日本人大学生が自身の考えを表現する際にどのような言語資源を選択するか、その選択の仕方に共通する点はあるかどうか、共通する課題や問題点があるとすればそれはどのようなことかを整理することを目的に実施される。

本研究では、日本人大学生の英語によるライティング能力の中でも、特に学習者がどのように「結束性(cohesion)」を表現するかに焦点を当てる。「結束性(cohesion)」とは、語と語、句と句、文と文が明示的に結びついている現象で、語と語、句と句、文と文の結束性がすなわちテキスト全体の論理の一貫性(coherence)につながっていく。語と語、句と句、文と文の間に結束性が欠落してしまうと、結果的に、テキスト全体の論理の一貫性も失われ、全体として書き手が何を伝えようとしていたのかが読み手に伝わらなくなる。このように、結束性と一貫性の間には密接な相互作用があり、「書き手が結束性実現のためにどのような言語項目を選択するか(meaning-making choices to create cohesion)」は、読み手の理解に大きな影響を与える。言い換えると、結束性はテキスト全体の質や評価を左右する重要なライティング構成要素だということである。本研究では、ライティングを書き手が様々な言語項目の中から文脈に合う最も適切な表現を「選択する行為(the act of meaning-making)」(Ryshina-Pankova & Byrnes, 2013, p. 195)と捉え、その上で「結束性」を、「読み手がテキスト内でアイデアを結びつけることを可能にする言語的手がかり(linguistic cues in the text that allow the reader to make connections between the ideas in the text)」(Crossley, Kyle & McNamara, 2016, p. 2)と定義する。

そして、日本人大学生のライティングにおける結束表現の使用傾向と、ライティングの総合評価を合わせて考えることにより、2010年代に学校教育の中で英語を学習した日本人大学生が、どのような文章を産出しているか、その実態を明らかにすることを試みる。

2. 先行研究

2.1 日本人英語学習者のライティング経験

日本の中学・高等学校の英語授業におけるライティング活動では、従来、和文英訳のような文脈のない単文を書く活動が中心であったことが報告されている(大井, 2018)。つまり、特定の目的を達成するために読み手に向けて文章を書く(learning-to-write)活動よりも、目標言語を学ぶために書く(writing-to-learn)活動が中心であったということである(保田, 2014)。保田・大井・板津(2014)は、国立・私立大学に在籍する日本人大学生(N = 481)を対象に大規模アンケートを実施し、高校時代に経験した英語ライティング活動を調査したが、その結果、「日本語の短文を英語に訳す」、「文法や語句に注意して書く」といった理解を確かめるためのエクササイズ型のライティング活動が高い数値を示した一方で、「受信した内容を自分の言葉で要約する」、「自分の考えを英語で書く」、「特定の状況で目的を持って書く」といった活動は低い数値を示し、コミュニケーション型のライティング活動はあまり行われていなかった傾向を明らかにしている。Yasuda(2014)は、日本の高等学校におけるこうしたライティング活動の傾向を「正確さ偏重のライティング活動」と述べ、背景には、学習指導要領がコミュニケーション能力の育成に向けて改編されていく一方で、伝統的な英語教育の手法を採用せざるを得ない高校英語教育の現状があると指摘している。

Watanabe (2016)も、この「大学入試に備えた英語ライティング」の現状を指摘している。Watanabe(2016)は、2013年に日本の首都圏で行われた大学入試の中から50問のエッセイ課題を収集し分析した。その結果、日本の大学入試におけるエッセイ課題には、“expositions”, “personal reflections”, “discussions”, “sequential explanations”の四つのジャンルがあることが分かった。Watanabe (2016)によれば、その中でも、“expositions”と“personal reflections”の割合が特に大きく、“expositions”は全体の42.8%、“personal reflections”は41.1%を占めていた。仮に、高校における英語ライティング指導が大学入試を目標として行われているのであれば、ライティングの練習内容が“expositions”と“personal reflections”の二つのジャンルに偏っている可能性がある」と指摘している。同様に、保田・大井・板津(2014)の調査でも、高校での英語授業で書いたことのある「ジャンル」については、与えられたテーマについて自分の意見を論述するいわゆる「意見文」や「論証文」が高い頻度を示したことから、大学入試が高校の授業でのライティング活動に与える波及効果(washback effect)が示唆される。

2.2 ライティングにおける結束性

結束性(cohesion)とは、「語と語、文と文が明示的に互いに結びついてテキストを構成すること」(白畑・富田・村野井・若林, 2019, p. 48)であり、文章の読みやすさに最も影響を与える構成要素の一つである(細川, 2010)。ライティングにおける結束性についての先行研究では、しばしばHalliday and Hasan(1976)の分類が用いられている。Halliday and Hasan(1976)は、結束性には文法的結束性(grammatical cohesion)と語彙的結束性(lexical cohesion)があり、文法的結束性はさらに指示(reference)、代用(substitution)、省略(ellipsis)、接続(conjunction)の四つの要素に分類できるとしている。表1にそれぞれの要素の具体例を示す。

2.3 日本人英語学習者のライティングにおける言語的特徴

日本人英語学習者のライティングにおける言語的特徴については、大規模な学習者コーパスに基づいて様々な調査結果が報告されている。まず、日本人英語学習者が産出する英文に話し言葉的な特徴があるということが、複数の研究で明らかにされている。小林・阿部・成田(2013)は、ICNALEのデータを使用し、書き手の習熟度と母語が第二言語ライティングに与える影響を調査した。その結果、A2～B2レベルの日本人学習者が書いた英語エッセイには、書き言葉よりも話し言葉に近い特徴が多くあることが分かった。また、日本人学習者が英語エッセイで*I think*という表現を過剰使用することについては、母語である日本語の影響によるものであるとしている。

同様にICNALEを使用した研究としては、石川(2019)がある。石川(2019)は、ICNALEのエッセイデータに含まれるB1_lowレベルの日本人のデータを、同じくB1_lowレベルの中国人のデータ及び英語母語話者のデータと比較し、日本人学習者の英語使用の特徴について分析した。その結果、(1)日本人学習者が英語エッセイを書く際に使用する語彙の広さは、英語母語話者の62%程度、中国人学習者の77%程度であること、(2)日本人学習者は*we*や*people*のような明確な参照先を持たない曖昧な複数人称名詞を主語に立てて文を作ることが多いこと、(3)*so*や*but*

表1 文法的結束性の四つの要素の具体例

Reference	pronominals (e.g., <i>That new house is John's.—He had <u>it</u> built last year.</i>) demonstratives (e.g., <i>Pick <u>these</u> up!</i>) definite articles (e.g., <i>Wash and core six cooking apples. Put <u>the</u> apples into a fireproof dish.</i>) comparatives (e.g., <i>I was expecting someone <u>different</u>.</i>)
Substitution	noun substitution (e.g., <i>These biscuits are stale. Get some fresh <u>ones</u>.</i>) verb substitution (e.g., <i>Does she sing?—No, but Mary <u>does</u>.</i>)
Ellipsis	e.g., <i>The men got back at midnight.—Both φ were tired out.</i> <i>Have you been swimming?—Yes, I have φ.</i> <i>Who killed Cock Robin?—The sparrow φ.</i>
Conjunction	additive (e.g., <i>and, furthermore, that is, in the same way</i>) adversative (e.g., <i>yet, but, however, actually, on the contrary</i>) causal (e.g., <i>so, hence, therefore, in that case</i>) temporal (e.g., <i>then, after that, previously, in the end</i>)

(Yasuda (2019) を参考に筆者作成)

のような論理関係や接続関係を明示する語や思考動詞 *think* を多用することが明らかとなった。

Narita, Sato and Sugiura (2004) は, International Corpus of Learner English (ICLE) に含まれている日本人英語学習者のエッセイデータと, Louvain Corpus of Native English Essays (LOCNESS) に含まれている英語母語話者のエッセイデータのうちアメリカ人のデータを使用し, 日本人英語学習者の *connector* の使用について分析した。日本人英語学習者は文頭での *connector* の使用率が高いこと, *for example, of course, first, moreover, in addition* という *connector* を過剰使用していること, *then, yet, instead* という *connector* を過少使用していることが明らかとなった。日本人英語学習者の *for example* の過剰使用については, 小林 (2010) においても報告されている。

小林 (2009a) は, ICLE に含まれている日本人英語学習者のエッセイデータと, LOCNESS に含まれている英語母語話者のエッセイデータを使用し, 談話分析の観点から日本人英語学習者のエッセイに見られる特徴を抽出した。メタディスコースマーカー (Hyland, 2004) のカテゴリーの一つである *self-mentions* については, 日本人英語学習者は *I, we, my, me* を過剰使用していることが分かった。また, *frame markers* については, *firstly, secondly, finally* のような順序を表す語句の過剰使用が見られた。日本人英語学習者が 1 人称代名詞を多用する傾向があることは, 成田 (2017) においても報告されており, 日本人英語学習者の大きな特徴の一つであると言える。

特定の品詞についての研究としては, 金子 (2013) がある。金子 (2013) は, ICLE のエラータグ付き日本人サブコーパスを使用し, 日本人大学生の英語の冠詞使用について調査した。その結

果, 日本人英語学習者に最も多い冠詞使用の誤りは冠詞の脱落であり, 定冠詞の脱落よりも不定冠詞の脱落の方が多いたことが分かった。

沢谷・鈴木(2016)の研究では, (1)「指示」の結束性指標については, **personal pronoun** が最も多く用いられ, 次いで **definite article** が多く用いられること, (2)「連結詞」の結束性指標については, **logical connectives** (例: **or / if / unless**), **causal connectives** (例: **because / so**), **additive connectives** (例: **and / moreover**) の順で多く用いられること, (3)「語彙的結束性」の指標については, **repetition** が他の要素より著しく多く用いられることが明らかとなった。その他, 英語ライティング能力とディスコースモードの違いがライティングの文法的結束性に影響を与えるかについて調べた工藤(2010)は, 論説文を書く力が上がると, 定冠詞 **the** の使用頻度が増え, 名詞の表し方に多様性が見られるようになるとしている。

このように先行研究では, 日本人英語学習者がライティングにおいて使用する結束性表現の特徴が様々な観点から報告されている。しかし, 現存する先行研究では, 学習者の「ライティング能力」と「結束性表現の使用」の関係についてはまだ十分に検証されていない。さらに, 日本人英語学習者のライティングに共通して見られる結束性表現の特徴について, 他国の英語学習者との比較を通して調査された実証研究は知る限りほとんどない。そこで, 本研究では, これらの点について明らかにすべく, 次の二つのリサーチクエスチョンを設定することとした。

3. リサーチデザイン

3.1 研究目的と RQ

本研究の目的は, 日本人英語学習者による結束性マーカーの使用傾向を(1)習熟度の違い, (2)東アジア諸国(中国, 台湾, 韓国)の学習者との違いの観点から明らかにすることである。これらの目的を達成するため, 本研究では次の二つのリサーチクエスチョン(RQ)を設定する。

RQ1: 日本人英語学習者のうち, ライティング評価のスコアが高い学習者と低い学習者を比較した場合, 使用する結束表現には違いがあるか。あるとすれば, どのような違いがあるか。

RQ2: 東アジア3ヶ国(中国・台湾・韓国)と日本の英語学習者のライティングを比較した場合, 日本人英語学習者が使用する結束表現に特徴は見られるか。見られるとすれば, どのような特徴か。

3.2 データ

本研究では, 英語学習者コーパスの一つである **International Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE)** のデータのうち, エッセイデータとエッセイ評価データを使用する。日本人英語学習者の多くに共通して見られるような問題点を明らかにし, 改善策を検討するためには, 特定の学校に在籍する英語学習者のデータではなく, 大規模コーパスを使用した方が適切であると考えためである。ICNALEにはアジア圏10カ国・地域の大学生・大学院生と, 英語母

話者のエッセイデータ 5,600 本(2,800 人分)が含まれているが、本研究では日本・中国・台湾・韓国の英語学習者のデータを使用する。各学習者のデータには、CEFR に基づく英語の習熟度が付与されている。エッセイは「大学生のアルバイトの是非」と「レストラン全面禁煙の是非」という二つのテーマで書かれた *argumentative essay* である。また、エッセイを書く際には条件が統制されており、辞書使用不可、ワープロ使用必須、スペルチェッカ使用必須となっている。執筆時間は 1 エッセイにつき 20~40 分、1 エッセイの長さは 200~300 語である(Ishikawa, 2013; 石川, 2019)。

また、ICNALE のエッセイデータ 5,600 本のうち 640 本(320 人分)には、エッセイの質を示唆する点数がついている。この評価は、Jacobs *et al.*(1981)の ESL Composition Profile のルーブリックに基づいて、学術論文の専門業者によって行われた(Ishikawa, 2018; 石川, 2019)。評価のデータは ICNALE のウェブサイトからダウンロード可能なファイルである ICNALE infosheet に含まれている(Ishikawa, 2020)。

3.3 分析方法

本研究では、上述した ICNALE のエッセイデータとエッセイ評価データを用いて、日本人大学生の英語ライティング能力の実態について調べるため、質的・量的両方の観点から調査分析する。質的手法と量的手法の両方を用いる研究手法はミックス法と呼ばれるものである。ミックス法では、ポスト実証主義的な立場と構成主義的な立場の二つの立場を統合することにより、複雑な社会現象の本質をより包括的に捉えることを可能にしている(抱井・稲葉, 2011, p. 200)。この手法を用いることにより、本研究の妥当性を高めることが可能になると考える。

各リサーチクエスションにおける具体的な分析方法は次のとおりである。

まず、RQ1 については、ICNALE の日本人英語学習者のエッセイデータ 800 本(400 人分)のうち、エッセイ評価データのある 80 本(40 人分)のみをサンプルとして抜き出し、使用する。80 本のうち 40 本はテーマ「大学生のアルバイトの是非」について書かれたエッセイであり、残りの 40 本はテーマ「レストラン全面禁煙の是非」について書かれたエッセイである。これら二つのテーマのエッセイデータを、エッセイ評価データに含まれる総合スコアによってそれぞれ上位層と下位層に分ける。表 2 は日本人英語学習者によって書かれたエッセイの総合スコアについての統計量をテーマ別にまとめたものである。また、図 1 は表 2 に示した統計量をもとに作成した箱ひげ図である。Y 軸はエッセイの総合点を示しており、満点は 100 点である。エッセイのテーマ別に統計量の四分位数を計算すると、テーマ「大学生のアルバイトの是非」では、第 1 四分位数 56.70、第 3 四分位数 70.43 となり、テーマ「レストラン全面禁煙の是非」では、第 1 四分位数 55.00、第 3 四分位数 63.30 となる。したがって、テーマ「大学生のアルバイトの是非」については、日本人学習者によって書かれたエッセイ 40 本のうち、総合スコアが 70.43 以上のエッセイ 10 本を上位層、スコア 56.70 以下のエッセイ 11 本を下位層とし、テーマ「レストラン全面禁煙の是非」については、日本人学習者によって書かれたエッセイ 40 本のうち、総合スコアが 63.30 以上のエッセイ 13 本を上位層、55.00 以下のエッセイ 12 本を下位層とする。

表2 日本人英語学習者の総合スコアについての統計量

	「大学生のアルバイトの是非」 (N = 40)	「レストラン全面禁煙の是非」 (N = 40)
平均点	65.38	58.67
標準偏差	9.48	6.84
最小値	50.00	35.00
最大値	86.70	71.70

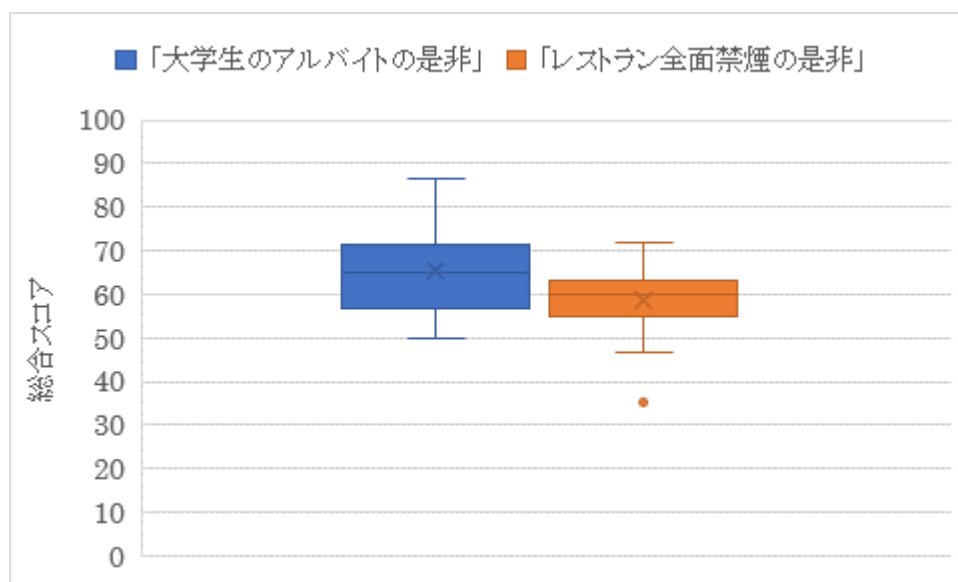


図1 日本人英語学習者の総合スコアの箱ひげ図

さらに、テーマごとに上位層エッセイコーパスと下位層エッセイコーパスを作成した。その結果、テーマ「大学生のアルバイトの是非」の上位層エッセイコーパスは総語数 2,385 語、学習者一人当たりの語数平均 238.50 語、標準偏差(SD) 29.28 となり、下位層エッセイは総語数 2,384 語、学習者一人当たりの語数平均 216.73 語、標準偏差(SD) 18.42 となった。また、テーマ「レストラン全面禁煙の是非」の上位層エッセイコーパスは総語数 3,036 語、学習者一人当たりの語数平均 233.54 語、標準偏差(SD) 31.27 となり、下位層エッセイは総語数 2,642 語、学習者一人当たりの語数平均 220.17 語、標準偏差(SD) 12.84 となった。

RQ1 では、このようにして作成した四つのエッセイコーパスを使用し、各層のエッセイにおいて使用されている結束表現の数を数え、その使用のされ方を観察する。結束表現の数を数える際には、コンコーダンスの AntConc を利用する。

RQ2 については、Halliday and Hasan(1976)の「文法的結束性(grammatical cohesion)」のうち、「指示(reference)」と「接続(conjunction)」に焦点を当てる。文法的結束性にはこのほかに「代用(substitution)」と「省略(ellipsis)」もあるが、ICNALE のエッセイデータを使用したパイロットスタディの結果、ほとんど出現しなかったため、RQ2 のデータ分析からは除外した。ICNALE

のエッセイデータのうち、英語の習熟度レベルが A2 レベルと B2 レベルの日本・中国・台湾・韓国の英語学習者によって書かれたエッセイの中で **Reference** と **Conjunction** がどの程度使用されているかを数え、比較することによって、日本人英語学習者が使用する結束表現に見られる特徴を明らかにする。A2 レベルの学習者の人数は、日本人 154 人、中国人 50 人、台湾人 29 人、韓国人 75 人であり、B2 レベルの学習者の人数は、日本人 18 人、中国人 13 人、台湾人 23 人、韓国人 76 人である。

RQ2 では、**Reference** と **Conjunction** のうち、次の語の出現頻度を比較する。

Reference

- Pronominal: it
- Demonstrative: this/these, that/those
- Definite Article: the

Conjunction

- Additive: and, for example, in addition, moreover
- Adversative: but, however, even if, in fact
- Causal: because, so, therefore, if
- Temporal: first(ly), second(ly), last(ly) + final(ly), when

これらの語を選んだ理由は、日本人学習者のコーパスデータを分析した際、これらの語の出現頻度が顕著に高かったからである。RQ2 では、この出現頻度の傾向が他の東アジアの学習者(中国・台湾・韓国)のエッセイにも見られるかどうかを分析する。もし、他の東アジアの学習者のエッセイで、これらの語の頻度が顕著に低いということになれば、他にどのような結束性マーカーが使用されているのかを、一文一文を丁寧に見ることにより、質的に分析する。出現頻度の調査には AntConc を利用する。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 の分析結果

RQ1 日本人英語学習者のうち、ライティング評価のスコアが高い学習者と低い学習者を比較した場合、使用する結束表現には違いがあるか。あるとすれば、どのような違いがあるか。

4.1.1 結束性に関わる接続表現の頻度

まず、上位層と下位層に属する学習者が、それぞれ「大学生のアルバイトの是非」と「レストラン全面禁煙の是非」のエッセイにおいて、どのような結束性表現を使用しているかを、使用頻度に着目して調査した。表 3、表 4、表 5 は、それぞれのトピックについてのエッセイにおける付加的、反意的、因果的接続表現の使用頻度を示したものである。表中の調整頻度はいずれも 1,000 語あたり

である。上位層と下位層の使用頻度の差の間に統計的に意味のある差(有意差)が存在するかどうかを検証するために log-likelihood test を行った。さらに、実質的な差がどの程度あるかを検証するためにオッズ比(odds ratio)を算出し、効果量検定を行った。

表3, 表4, 表5に示された結果から、付加的接続表現については等位接続詞の **and**, 反意的接続表現については等位接続詞の **but**, 因果的接続表現については等位接続詞の **so** と接続詞の **because** と **if** の使用頻度が、どちらのテーマにおいても顕著に高いことが分かる。これらの結束性表現では、上位層と下位層の間に意味のある差は観察されなかったことから、習熟度レベルやエッセイのテーマに関係なく、これらの結束性表現が日本人英語学習者によって多用される傾向があるといえるかもしれない。

先行研究で日本人英語学習者によって多用される傾向があると指摘されている付加的接続表現 **for example** については、本研究の調査では、下記のような使用例が確認された。いずれも文頭に **for example** が置かれ、論理の展開方法に共通点があることが分かる。

【Excerpt 1】

・I learned many important things. **For example**, how to talk with boss, how to deal with personal information, how to associate with my colleague. (W_JPN_PTJ0_001_B1_1)

【Excerpt 2】

・Moreover, even for students in rich family, earning money is important because by using that money they can do many things. **For example** they can travel or study abroad. (W_JPN_PTJ0_025_B1_2)

【Excerpt 3】

・Smoking in restaurants has two bad things. One is that smell of smoking is bad for foods. **For example**, we can't enjoy the smell of foods if there are people who are smoking in the restaurant. (W_JPN_SMK0_018_B1_1)

反意的接続表現の使用頻度については上位層と下位層ともに **but** の使用頻度が顕著に高かったが、その使い方には共通点があった。また、副詞の **however** の方が適している文脈においても、上位層と下位層のどちらも **but** の方を多く使用していることが分かった。下記に例を挙げる。

【Excerpt 4】

・What students have to do is study, **but** some students can't study enough because of their part-time job. (W_JPN_PTJ0_010_B1_2)

表3 付加的接続表現の使用頻度(1,000語あたり)

表現	「大学生のアルバイトの是非」				「レストラン全面禁煙の是非」			
	上位層		下位層		上位層		下位層	
	(N = 10)		(N = 11)		(N = 13)		(N = 12)	
	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度
also	3	1.26	0	0.00	3	0.99	0	0.00
and	14	5.87	12	5.03	18	5.93	22	8.33
and also	1	0.42	0	0.00	0	0.00	0	0.00
besides	0	0.00	1	0.42	0	0.00	1	0.38
for example	5	2.10	4	1.68	3	0.99	3	1.14
for instance	1	0.42	1	0.42	0	0.00	0	0.00
I mean	0	0.00	0	0.00	0	0.00	1	0.38
in addition	0	0.00	1	0.42	3	0.99	2	0.76
in other words	0	0.00	0	0.00	1	0.33	1	0.38
in the same way	0	0.00	0	0.00	1	0.33	0	0.00
moreover	2	0.84	0	0.00	2	0.66	2	0.76
or	2	0.84	2	0.84	0	0.00	2	0.76

表4 反意的接続表現の使用頻度(1,000語あたり)

表現	「大学生のアルバイトの是非」				「レストラン全面禁煙の是非」			
	上位層		下位層		上位層		下位層	
	(N = 10)		(N = 11)		(N = 13)		(N = 12)	
	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度
actually	0	0.00	2	0.84	2	0.66	1	0.38
although	1	0.42	0	0.00	1	0.33	0	0.00
as	0	0.00	0	0.00	1	0.33	0	0.00
but	11	4.61	10	4.19	12	3.95	11	4.16
even if	2	0.84	2	0.84	7	2.31	1	0.38
however	4	1.68	2	0.84	4	1.32	4	1.51
in fact	1	0.42	0	0.00	3	0.99	0	0.00
nevertheless	0	0.00	0	0.00	1	0.33	0	0.00
though	0	0.00	0	0.00	2	0.66	2	0.76
while	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00

表5 因果的接続表現の使用頻度(1,000語あたり)

表現	「大学生のアルバイトの是非」				「レストラン全面禁煙の是非」			
	上位層		下位層		上位層		下位層	
	(N = 10)		(N = 11)		(N = 13)		(N = 12)	
	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度
as	1	0.42	1	0.42	0	0.00	1	0.38
as a result (of this)	0	0.00	0	0.00	2	0.66	0	0.00
as long as	1	0.42	0	0.00	1	0.33	0	0.00
because	6	2.52	9	3.78	5	1.65	9	3.41
consequently	0	0.00	1	0.42	0	0.00	0	0.00
if	11	4.61	17	7.13	16	5.27	14	5.30
in case	0	0.00	0	0.00	0	0.00	1	0.38
otherwise	0	0.00	0	0.00	0	0.00	1	0.38
since	0	0.00	0	0.00	2	0.66	0	0.00
so	8	3.35	11	4.61	9	2.96	11	4.16
therefore	5	2.10	2	0.84	6	1.98	2	0.76
thus	3	1.26	0	0.00	1	0.33	0	0.00

【Excerpt 5】

・Recently in most of restaurants, smoking area and non-smoking area is divided, **but** it is impossible to shut out smoke and bad smell completely. (W_JPN_SMK0_025_B1_2)

【Excerpt 6】

・It is difficult that they are independent from their parents completely, **but** it is important to do that in some points. (W_JPN_PTJ0_029_B1_1)

【Excerpt 7】

・Some restaurants separate the seat for non-smoker, **but** the smoke could reach to non-smoker. (W_JPN_SMK0_004_B2_0)

因果的接続表現として使用頻度が顕著に高かった **so** については、上位層、下位層ともに、**so** を文頭に置いて前文とつなげる使い方が目立った。また、副詞の **therefore** の方が適している文脈においても、上位層と下位層のどちらも **so** の方を多く使用する傾向があった。下記に例を挙げる。

【Excerpt 8】

•To enjoy eating all of the people, each person should stop smoking. So all the restaurants should make a rule that bans smoking. (W_JPN_SMK0_043_B1_1)

【Excerpt 9】

•They should pay the costs by themselves. So they should have a part-time job. (W_JPN_PTJ0_028_A2_0)

小林(2009b)では, 日本人英語学習者の英語エッセイにおいて文頭で *because* が使用されている場合, そのほとんどが主節を持たない断片文である傾向が高いことが報告されているが, 本研究で使用した ICNALE のデータにおいても, *because* が誤用されている例があった。上位層と下位層それぞれの *because* の使用例を下記に挙げる。

【Excerpt 10】

•In a college, it is difficult to find so many kinds of friends because ages and departments are limited. (W_JPN_PTJ0_015_B1_2)

【Excerpt 11】

•First, I think we don't need to smoke in a restaurant, because we go to there to enjoy good dishes not to smoke. (W_JPN_SMK0_007_A2_0)

【Excerpt 12】

•I agree with having a part-time job but it is better to work during long vacation like summer or spring. Because student first priority is study and part-time job should not interrupt their study. (W_JPN_PTJ0_024_B1_1)

【Excerpt 13】

•Smokers should put up with smoking in restaurants. Because it is only an hour or more. (W_JPN_SMK0_005_B2_0)

上位層の使用例である Excerpt 11 と Excerpt 12 は, どちらも *because* が正しく使用されている文である。一方, 下位層の使用例である Excerpt 12 と Excerpt 13 は, どちらも文頭で *because* が使用されているが, 主節のない断片文となっており, *because* の誤用例である。

付加的接続表現, 反意的接続表現, 因果的接続表現のうち, 上位層と下位層との間で意味のある差が確認された結束性表現は *also* であった ($\log\text{-likelihood} = 4.16$, $p < 0.05$, $\text{odds ratio} =$

0.21)。この付加的接続表現については上位層だけが使用していた。例えば、次のような文章である。

【Excerpt 14】

In this case, they have to take seats in a smoking section, and they automatically breathe smoke. Also, just separating the sections cannot prevent non-smokers from breathing smoke perfectly. (W_JPN_SMK0_023_B2_0)

【Excerpt 15】

Before entering universities (even after entering them), all most no students haven't decided what type of jobs they want to do or which company they are interested in. For those students, part-time jobs are good chance to find a job which they truly want to do. And also, in Japan, once we enter a company, it's very difficult to quit the job and to find another job, even if the job is uncomfortable, but you could have many part-time jobs and quit them easily. (W_JPN_PTJ0_012_B2_0)

Excerpt 14 は、喫煙席に座らなければならなかった場合の受動喫煙の可能性について述べている。Also という付加的結束性表現を用いることで、喫煙席と禁煙席を単に分けるだけでは完全に受動喫煙を防ぐことはできないという情報を追記し、読み手に喫煙の弊害を説得的に伝えようとしていることが分かる。すなわち、Also を使用することで、自らの主張の根拠を連続して複数示しているということである。Excerpt 15 では、アルバイトをすることの利点を述べた後、それに続く And also から始まる文で正社員になった場合の辞めにくさや転職のしづらさについても述べ、学生の間にアルバイトでさまざまな経験をすることの良さを強調している。これらの結束性ストラテジーが上位層だけで確認されたことは興味深い。

表 6 は、時間的接続表現の使用頻度を示している。表 6 に示された結果から、first(ly), second(ly), when の使用頻度がどちらのテーマにおいても顕著に高いことが分かる。上位層と下位層で意味のある違いが確認されなかったことから、これらの結束性表現は、日本人英語学習者によって多用される傾向があるといえるかもしれない。Third(ly) や last(ly) の使用頻度が低くなった理由としては、ICNALE のエッセイが、20～40 分という時間制限の中で書かれたものであることが考えられる。こうした制限によって三つ以上の理由を書く時間や文字数が不足し、third(ly) や last(ly) といった表現の使用数が少なくなった可能性がある。

4.1.2 結束性に関わる指示表現の頻度

接続表現と同様、指示表現も文章の結束性に影響を与える重要な結束性マーカーである。表 7 は、二つのエッセイにおける上位層と下位層の指示詞の使用頻度を示したものである。日本人英語学習者によって最も多く使用されていた指示詞は、上位層、下位層ともに前文の旧情報を受け

表6 時間的接続表現の使用頻度(1,000語あたり)

表現	「大学生のアルバイトの是非」				「レストラン全面禁煙の是非」			
	上位層		下位層		上位層		下位層	
	(N = 10)		(N = 11)		(N = 13)		(N = 12)	
	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度
after	2	0.84	0	0.00	0	0.00	0	0.00
as	1	0.42	0	0.00	1	0.33	0	0.00
as long as	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
at first	0	0.00	0	0.00	1	0.33	0	0.00
at last	0	0.00	0	0.00	1	0.33	0	0.00
at the same time	0	0.00	1	0.42	0	0.00	2	0.76
before	4	1.68	1	0.42	0	0.00	0	0.00
by the time	0	0.00	0	0.00	0	0.00	1	0.38
final(ly)	1	0.42	1	0.42	0	0.00	1	0.38
first(ly)	7	2.94	5	2.10	7	2.31	3	1.14
in conclusion	1	0.42	0	0.00	2	0.66	0	0.00
last(ly)	1	0.42	0	0.00	1	0.33	1	0.38
next(ly)	0	0.00	1	0.42	0	0.00	0	0.00
second(ly)	5	2.10	3	1.26	6	1.98	4	1.51
since	0	0.00	1	0.42	1	0.33	0	0.00
then	0	0.00	0	0.00	1	0.33	0	0.00
third(ly)	1	0.42	3	1.26	2	0.66	0	0.00
until	1	0.42	1	0.42	0	0.00	1	0.38
when	9	3.77	10	4.19	7	2.31	3	1.14
while	0	0.00	1	0.42	3	0.99	0	0.00

て結束性を作り出す **this** であった。**here, there, then** はテーマ「大学生のアルバイトの是非」では一度も使用されなかった。下記に例を挙げる。

【Excerpt 16】

•They mainly spend their money clothes, their hobby, dating, traveling and so on. **This** means most of them don't work for living. (W_JPN_PTJ0_010_B1_2)

表7 結束性に関わる指示詞の使用頻度(1,000語あたり)

表現	「大学生のアルバイトの是非」				「レストラン全面禁煙の是非」			
	上位層		下位層		上位層		下位層	
	(N = 10)		(N = 11)		(N = 13)		(N = 12)	
	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度	粗頻度	調整 頻度
this	12	5.03	5	2.10	18	5.93	7	2.65
these	3	1.26	2	0.84	2	0.66	3	1.14
that	2	0.84	3	1.26	0	0.00	9	3.41
those	3	1.26	1	0.42	2	0.66	0	0.00
here	0	0.00	0	0.00	1	0.33	0	0.00
there	0	0.00	0	0.00	1	0.33	3	1.14
then	0	0.00	0	0.00	2	0.66	0	0.00

【Excerpt 17】

・Certainly, smoking must be bad for health. There are scientific evidences and everyone knows **this** fact. (W_JPN_SMK0_016_B1_2)

【Excerpt 18】

・Through a part-time job, I learned a difficulty of earning. Therefore, I learned to use money very carefully. **This** is an important thing in my life. (W_JPN_PTJ0_016_B1_2)

【Excerpt 19】

・The cancer called Haigan is the worst sickness. **This** sickness's killing rate is high rate and a lot of Japanese people were killed by **this** sickness. (W_JPN_SMK0_033_A2_0)

4.1.3 名詞化

前の文で使用した動詞や形容詞を、次の文では-tion, -ment, -ness, -ity といった接尾辞を付けた名詞の形で使用する「名詞化(nominalization)」については、習熟度が高く複雑な文章を書くことができる学習者が書いた文章に見られる傾向がある(“high-rated texts are related to knowledge construction through nominalization”)ことが知られている(Ryshina-Pankova, 2006; Ryshina-Pankova & Byrnes, 2013)。この現象については、本研究で分析対象としたエッセイデータには確認できなかった。ICNALE コーパス構築プロジェクトに参加し、このプロジェクトの目的でエッセイを執筆した日本人英語学習者が、「名詞化」のテクニックを使用できるほどには英語ライティングに習熟していなかった可能性がある。

4.2 RQ2 の分析結果

RQ2 東アジア 3 ヶ国(中国・台湾・韓国)と日本の英語学習者のライティングを比較した場合、日本人英語学習者が使用する結束表現に特徴は見られるか。見られるとすれば、どのような特徴か。

表 8, 表 9, 表 10, 表 11 は, 日本人学習者和其他の東アジアの学習者(中国・台湾・韓国)の結束性表現の使用頻度をまとめたものである。表中の数値は 1,000 語あたりの調整頻度である。各国の学習者の使用頻度の差の間に統計的に意味のある差(有意差)が存在するかどうかを検証するために log-likelihood test を行った。さらに, 実質的な差がどの程度あるかを検証するためにオッズ比(odds ratio)を算出し, 効果量検定を行った。

「大学生のアルバイトの是非」のエッセイについては, 分析対象とした 27 個の語句のうち, A2 レベルでは 19 個 (“it” “this” “these” “that” “the” “for example” “even if” “in fact” “because” “so” “therefore” “if” “first” “firstly” “second” “secondly” “last” “lastly” “when”), B2 レベルでは 11 個 (“this” “these” “the” “moreover” “but” “because” “so” “if” “firstly” “last” “when”) の語句で, 日本人学習者の使用頻度和其他の東アジアの学習者(中国・台湾・韓国)の使用頻度の間に有意差が見られた。特に, 顕著な差が見られた言語項目としては, 例えば the についての差が挙げられる。下位層の A2 レベルでは, 1,000 語あたり, 日本人英語学習者が 21 語の使用に対して, 中国人が 33 語($\log likelihood = 41.57, p < 0.001, odds ratio = 0.65$), 台湾人が 34 語($\log likelihood = 32.74, p < 0.001, odds ratio = 0.63$), 韓国人が 31 語($\log likelihood = 48.22, p < 0.001, odds ratio = 0.67$), 上位層の B2 レベルでは, 1,000 語あたり, 日本人英語学習者が 17 語の使用に対して, 中国人が 35 語($\log likelihood = 23.98, p < 0.001, odds ratio = 0.48$), 台湾人が 32 語($\log likelihood = 23.03, p < 0.001, odds ratio = 0.52$), 韓国人が 28 語($\log likelihood = 18.26, p < 0.001, odds ratio = 0.60$)と, 東アジア 3 カ国の学習者の the の使用が有意に高い傾向が示された。この結果は, 東アジア 3 カ国の学習者によって書かれた文章は, the の使用に伴い結束性が強まっている可能性を示唆している。

また, 「レストラン全面禁煙の是非」のエッセイについては, 分析対象とした 27 個の語句のうち, A2 レベルでは 13 個 (“this” “these” “that” “the” “for example” “but” “even if” “because” “first” “firstly” “secondly” “last” “finally”), B2 レベルでは 8 個 (“those” “the” “for example” “even if” “in fact” “because” “so” “firstly”) の語句で, 日本人学習者の使用頻度和其他の東アジアの学習者(中国・台湾・韓国)の使用頻度の間に有意差が見られた。特に, 顕著な差が見られた言語項目としては, 例えば that についての差が挙げられる。上位層の B2 レベルでは有意差は見られなかったが, 下位層の A2 レベルでは, 1,000 語あたり, 日本人英語学習者が 15 語の使用に対して, 中国人が 12 語($\log likelihood = 3.96, p < 0.05, odds ratio = 1.21$), 台湾人が 11 語($\log likelihood = 6.22, p < 0.05, odds ratio = 1.36$), 韓国人が 11 語($\log likelihood = 14.93, p < 0.001, odds ratio = 1.39$)と, 東アジア 3 カ国の学習者の that の使用が有意に低い傾向が示された。A2 レベルの韓国人については this の使用も有意に低く, 日本人が 5 語の使

用に対して、韓国人は3語 ($\log likelihood = 8.32$, $p < 0.01$, $odds ratio = 1.49$) である。これらの結果は、A2レベルの韓国人学習者によってかかれた文章は、**that** や **this** のような指示表現ではなく、他の結束性マーカーの使用によって文章の結束性を高めようとしている可能性を示唆している。

いずれのテーマにおいても、A2 から B2 に習熟度が上がると、日本人学習者の使用頻度と他の東アジアの学習者(中国・台湾・韓国)の使用頻度の間に有意差が見られる語句の数は減少した。

表 8 「大学生のアルバイトの是非」における A2 レベル学習者の結束表現の使用頻度
 (1,000 語あたり)

	日本	中国	台湾	韓国
it	15.70	13.87	11.25	11.78
this	4.92	2.65	5.08	3.81
these	1.69	0.97	0.15	1.13
that	14.13	10.60	7.70	12.08
the	21.05	32.33	33.58	31.60
for example	2.32	0.71	1.39	0.65
even if	0.34	0.00	0.31	0.42
in fact	0.37	0.18	0.00	0.06
because	4.55	1.77	4.93	7.14
so	9.78	6.80	5.24	7.38
therefore	1.09	0.27	0.31	1.67
if	5.61	3.71	6.47	6.72
first	2.86	2.03	1.54	1.73
firstly	0.37	1.15	0.15	0.00
second	1.97	1.15	0.77	0.83
secondly	0.51	0.88	0.15	0.06
last	0.26	0.80	0.31	0.12
lastly	0.14	0.09	0.00	0.00
when	4.32	2.74	4.31	4.28

表9 「大学生のアルバイトの是非」におけるB2レベル学習者の結束表現の使用頻度
 (1,000語あたり)

	日本	中国	台湾	韓国
this	5.14	2.68	1.37	3.00
these	3.04	0.00	0.68	2.57
the	16.58	34.52	31.76	27.70
moreover	0.00	0.30	0.85	0.48
but	5.84	2.68	3.93	4.02
because	3.04	0.30	2.56	3.48
so	7.01	4.17	3.07	3.48
if	6.07	3.57	3.07	4.77
firstly	0.70	0.60	0.00	0.27
last	0.00	0.30	1.37	0.43
when	2.34	2.08	5.29	3.11

表10 「レストラン全面禁煙の是非」におけるA2レベル学習者の結束表現の使用頻度
 (1,000語あたり)

	日本	中国	台湾	韓国
this	5.93	4.46	7.20	3.97
these	1.70	0.54	0.31	0.98
that	15.28	12.68	11.27	11.00
the	50.40	55.89	54.33	47.79
for example	1.16	0.63	0.31	0.18
but	8.91	6.61	9.86	7.88
even if	0.80	0.27	0.16	0.31
because	4.29	3.30	5.32	6.60
first	2.00	1.52	0.78	1.10
firstly	0.33	0.54	0.00	0.00
secondly	0.45	0.71	0.00	0.00
last	0.06	0.80	0.16	0.12
finally	0.00	0.18	0.00	0.37

表 11 「レストラン全面禁煙の是非」における B2 レベル学習者の結束表現の使用頻度

	(1,000 語あたり)			
	日本	中国	台湾	韓国
those	1.18	1.25	6.40	0.97
the	44.46	54.67	61.65	51.63
for example	0.71	0.31	0.00	0.74
even if	1.41	0.00	0.58	0.06
in fact	0.47	0.31	0.00	0.00
because	3.53	0.31	2.71	4.68
so	7.06	5.00	2.33	4.68
firstly	0.71	0.62	0.00	0.17

表 8, 表 9, 表 10, 表 11 に示す語句の中には, 日本人学習者の使用頻度と比較して, 中国・台湾・韓国人学習者の使用頻度が有意に低い語句もある。表 8 では, 中国人学習者の “this” “that” “for example” “even if” “because” “so” “therefore” “if” “when”, 台湾人学習者の “it” “these” “that” “in fact” “so” “therefore” “first” “second”, 韓国人学習者の “it” “for example” “in fact” “so” “first” “firstly” “second” “secondly” “lastly” の使用頻度が低い。表 9 では, 中国人学習者の “these” “but” “because”, 台湾人学習者の “this” “these” “so” “if” “firstly”, 韓国人学習者の “this” “so” の使用頻度が低い。表 10 では, 中国人学習者の “these” “that” “but” “even if”, 台湾人学習者の “these” “that” “for example” “even if” “first” “secondly”, 韓国人学習者の “this” “these” “that” “for example” “even if” “first” “firstly” “secondly” の使用頻度が低い。表 11 では, 中国人学習者の “even if” “because”, 台湾人学習者の “for example” “so” “firstly”, 韓国人学習者の “even if” “in fact” の使用頻度が低い。

それでは, 日本人学習者に比べて使用頻度が有意に低い語句がある場合, その代わりとしてどのような語句を使用しているのだろうか。例えば, テーマ「大学生のアルバイトの是非」における B2 レベルの台湾人学習者と日本人学習者の “so” の使用頻度を比べると, 日本人英語学習者が 1,000 語あたり約 7 語であるのに対して, 韓国人英語学習者は約 3 語にとどまっている ($\log likelihood = 7.93$, $p < 0.01$, $odds\ ratio = 2.28$)。同様に, 韓国人英語学習者も 1,000 語あたり約 3 語である ($\log likelihood = 9.04$, $p < 0.01$, $odds\ ratio = 2.01$)。このように, B2 レベルの台湾人英語学習者と韓国人英語学習者の “so” の使用頻度は, 日本人学習者の使用頻度と比較すると有意に低いことが明らかになった。

“so” に代わる表現として考えられるのは “hence” や “thus” である (OWL, 2020)。そこで, AntConc を使用し, “hence” の使用頻度を検索したところ, 日本人学習者と中国人学習者には使用が 1 例も見られなかったが, 台湾人学習者と韓国人学習者では使用例が見られた。それぞれの使用例は次の通りである。

【Excerpt 20】

• Hence, part time job should not be considered as a tool of making money, but an opportunity for one to cultivate social and working experiences, which are necessary for college students. (W_TWN_PTJ0_110_B2_0)

【Excerpt 21】

• Hence, students can know the society different from campus life. (W_KOR_PTJ0_219_B2_0)

このことは、同じ習熟度レベルであっても、日本人英語学習者に比べて、台湾、韓国の英語学習者の方が使用する結束性表現に幅がある可能性を示している。

4.3 考察

本研究の RQ1 では、日本人英語学習者をライティングの総合スコアによって上位層と下位層に分け、それぞれの層で使用する結束表現に違いがあるか、あるとすればどのような違いがあるかを調査した。その結果、付加的・反意的接続表現については、上位層か下位層かの習熟度に関係なく、and, but, so といった等位接続詞の使用頻度が顕著に高い傾向があることが明らかになった。因果的接続表現については、because と if が多く用いられる傾向があり、これについても上位層と下位層で意味のある差は確認されなかった。時間的接続表現については、first(ly), second(ly), when の使用頻度が顕著に高く、上位層、下位層ともに、これらの結束表現を多用する傾向が見られた。これらの結束性表現は、習熟度のみならずエッセイのトピックにも影響を受けない形で、日本人英語学習者に多用される傾向があったことから、and, but, so, because, if, first(ly), second(ly), when の多用は、日本人英語学習者による英語ライティングにおける言語的特徴の一つであると解釈できるかもしれない。because については、日本人英語学習者によるエッセイにおいて文頭で使用される場合、主節を持たない断片文(例: Smokers should put up with smoking in restaurants. Because it is only an hour or more.)である傾向が高いことが先行研究で報告されているが、本研究においても、この断片文での使用傾向を確認することができた。以上のことから、本研究の結果は、日本人英語学習者の言語的特徴に関するこれまでの先行研究の結果を追認したと言える。また、この結果は、CEFR が示すような英語の習熟度の指標は、「英語で書く力」とは質の異なるものである可能性を示唆している。「言語能力」と「ライティング能力」は重なる部分はあるとしても、別々のスキルであるというように解釈できるかもしれない。

また、本研究は、日本人英語学習者によるエッセイの言語的特徴を、同じ外国語環境で学ぶ中国、台湾、韓国の学習者との比較を通して調査した。その結果、「大学生のアルバイトの是非」と「レストラン全面禁煙の是非」いずれのトピックにおいても、下位層では結束性表現の使用に意味のある差が確認された。例えば、下位層では、結束性表現の一つである the において、日本人英

語学習者の使用頻度が顕著に低かったのに対し、中国、台湾、韓国の英語学習者は、1,000語あたりその倍以上の頻度で **the** を使用して結束性を作り出していた。他にも、指示表現である **that** や **this** において、日本人英語学習者よりも中国、台湾、韓国の英語学習者の方が、使用頻度が有意に低いことが分かった。

しかし、習熟度が A2 レベルから B2 レベルに上がると、日本人学習者の使用頻度と他の東アジアの学習者（中国・台湾・韓国）の使用頻度の間に有意差が見られる語句の数は減少した。学習者の習熟度が上がり、エッセイ中で使用する結束性表現がより文脈に合う形で使用されることで、習熟度が低い場合には見られるような国・地域ごとの言語的特徴が消えていくと解釈できるかもしれない。

5. まとめ

本研究では、英語学習者コーパスである ICNALE のデータを使用し、日本人英語学習者が使用する結束表現とライティング評価スコアの関係に焦点を当て、分析を行った。分析の結果、学習者の習熟度やエッセイのトピックに関係なく、日本人英語学習者は、特定の結束性表現を多用する傾向があることが分かった。具体的には、等位接続詞 **and**, **but**, **so** や接続詞 **because**, **if**, **when** といった文法的結束マーカーで文と文をつなぎ、論理展開を明示的に示すという方法である。これらの結束性表現は、第二言語ライティングに関する先行研究では、習熟度が上がるにつれて減少し、上級の学習者は、接続詞のようなつなぎことばに頼らない形で結束性を作り出すことができるようになっていわれている。例えば、“**Because technology is getting better, people are able to write business programs faster.**” という文（接続詞 **because** を用いて結束性を作っている）は、習熟度が上がるにつれて、“**Advances in technology are making the writing of business programs faster.**” という文（接続詞に頼らずに、名詞句を用いて結束性を作っている）に変わっていくことが報告されている（Taverniers, 2003, p. 9）。本研究が対象とした ICNALE のエッセイでは、日本人英語学習者が名詞句を用いて結束性を作る例は確認されなかった。また、結束性マーカーの一つである **the** の使用については、中国や台湾、韓国の英語学習者の使用頻度に比べると日本人英語学習者の使用頻度は有意に低く、中国や台湾、韓国の英語学習者が使用できている **the** を日本人英語学習者が回避している可能性も示唆された。以上の結果は、正規教育で最低でも 6 年間の英語教育を受けてきた大学生であっても、英語によるライティング能力は十分に育っていない可能性を示している。

結束性は、ライティング能力の評価基準の一つとしてルーブリックに組み込まれていることが多く、文章全体の質に寄与する重要な構成概念である。しかし、本研究の結果は、日本人大学生が英語ライティングにおいて一部の結束性表現を過度に使用する傾向があることを明らかにした。したがって、結束性の高い文章が書けるようになるためには、様々な結束性表現があることを明示的に指導することが必要かもしれない。等位接続詞 **and**, **but**, **so** や接続詞 **if**, **when** は教科書の中でも扱われており、教室の中で明示的に指導される結束性表現である。一方で、冠詞の **the** や名詞句の使用による結束性については、学習の中で無意識に触れる機会はあるけれども、これらの言語資源

がどのように文と文の結束性を作り出し、全体として一貫した分かりやすいテキストを作り出しているかについては明示的に指導されることはほとんどない。特定の結束性表現を繰り返し使用するのではなく、分脈や目的に応じて最も適切な結束性表現を選択できるようになるためには、多様な意味選択資源(meaning-making resources)を備えておくことが必要である。そのためには、多様な結束性表現の「選択肢」があることを学習者に意識させることが第一歩となる。

しかし、本研究で得られた結果は、ICNALE に収容されたエッセイ(argumentative essay)の結果に基づくものであり、同様の結果が他の文脈でも得られるかどうか、結果の再現性をさらに検証していく必要がある。特に、学習者を上位層と下位層に分ける場合は、その能力に一定以上の幅があることが望まれる。本研究では、エッセイの総合スコアによって学習者を上位層と下位層に分けたが、使用する結束性表現にはグループ間で意味のある差は確認できなかった。習熟度別の傾向を調べるのであれば、幅広い能力を持つ学習者を対象とした調査が望まれる。また、ジャンルの影響もさらに検証する必要がある。本研究が対象とした ICNALE のエッセイは argumentative essay というジャンルであり、賛否両論あるテーマについて書き手が自身の見解を述べ、論拠やデータを提示してその見解の妥当性を読み手に説得的に伝える「論証型」の文章である。等位接続詞 and, but, so や接続詞 because, firstly, secondly といった結束性表現の使用頻度が高かったのは、学習者の特性というよりは、argumentative essay というジャンルの特性の結果であるということもできるかもしれない。今後は、別のジャンルにおいても、本研究で得られた結果が再現されるかについて検証が必要だと考える。

謝辞

本研究は修士論文を加筆・修正したものです。本研究を進めるにあたり、2 年間ご指導くださいました指導教員の保田幸子先生に心より感謝申し上げます。

引用文献

- アルク (2020). 「アルク英語教育実態レポート Vol.17 日本の仕事現場における英語使用実態調査—業務で英語を使用する 4 グループの抽出とその特徴分析—」
https://cdn2.alc.co.jp/sa/www/report/alc_report_20200623.pdf (2020 年 9 月 10 日アクセス)
- Crossley, S.A., Kyle, K., & McNamara, D.S. (2016). The development and use of cohesive devices in L2 writing and their relations to judgments of essay quality. *Journal of Second Language Writing*, 32, 1-16.
- Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. Longman (安藤貞雄他訳 (1997) 『テキストはどのように構成されるか—言語の結束性—』 ひつじ書房)
- Hyland, K. (2004). *Disciplinary discourses: Social discourses in academic writing*. University of Michigan Press. Ann Arbor.

- 細川博文 (2010). 「読みやすい文章作成指導」 木村博是・木村友保・氏木道人(編) 『リーディングとライティングの理論と実践』 (pp. 214-227), 大修館書店.
- 石川慎一郎 (2012). 『ベーシックコーパス言語学』 ひつじ書房.
- Ishikawa, S. (2013). The ICNALE and sophisticated contrastive interlanguage analysis of Asian learners of English. In S. Ishikawa (Ed.), *Learner corpus studies in Asia and the world, 1* (pp. 91-118). Kobe, Japan: Kobe University.
- 石川慎一郎 (2017). 『ベーシック応用言語学 L2 の習得・処理・学習・教授・評価』 ひつじ書房.
- Ishikawa, S. (2018). The ICNALE edited essays; A dataset for analysis of L2 English learner essays based on a new integrative viewpoint. *English Corpus Studies*, 25, 117-130.
- 石川慎一郎 (2019). 「英語学習者コーパス研究の現状と課題」 『電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ Fundamentals Review』 12(4), 280-289.
- Ishikawa, S. (2020). ICNALE: The international corpus network of Asian learners of English. <http://language.sakura.ne.jp/icnale/download.html> (2020年2月27日アクセス)
- Jacobs, H., Zinkgraf, S., Wormuth, D., Hartfiel, V., and Hughey, J. (1981). *Testing ESL composition: A practical approach*. Rowley, MA: Newbury House.
- 抱井尚子・稲葉光行 (2011). 「ミックス法」 末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子(編) 『コミュニケーション研究法』 (pp. 199-213), ナカニシヤ出版.
- 金子朝子 (2013). 「日本人大学生の英語の冠詞使用」 投野由紀夫・金子朝子・杉浦正利・和泉絵美(編著) 『英語学習者コーパス活用ハンドブック』 (pp. 34-42), 大修館書店.
- 金熙珍 (2017). 「言語戦略と知識移転: 日本企業を対象とした実証研究の方向性」 『組織科学』 50(4), 13-20.
- 経済産業省 (2012). 『通商白書 2012: 世界とのつながりの中で広げる成長のフロンティア』
- 小林雄一郎 (2009a). 「NS/NNS テキスト分類モデルに基づく日本人英作文の特徴抽出」 『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集—デジタル・ヒューマニティーズの可能性』 16, 261-268.
- 小林雄一郎 (2009b). 「日本人英語学習者の英作文における because の誤用分析」 『関東甲信越英語教育学会研究紀要』 23, 11-21.
- 小林雄一郎 (2010). 「多変量解析による世界の英語学習者の談話分析」 『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集—人文工学の可能性』 15, 41-48.
- 小林雄一郎・阿部真理子・成田真澄 (2013). 「書き手の習熟度と母語が第2言語ライティングに与える影響」 『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集—人文科学とコンピュータの新たなパラダイム』 4, 89-96.
- 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説 外国語編英語編

- 工藤洋路 (2010). 「英語ライティング能力習熟度とディスコースモードの違いによるライティングの文法的結束性の特徴に関する基礎研究」 *ARCLE Review* 4, 38-54.
- 文部科学省 (2017). 「平成 29 年度英語教育改善のための英語力調査 事業報告」 http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1403470.htm (2019 年 7 月 20 日アクセス)
- 成田真澄 (2017). 「日本人大学生が産出した英語論述文における主格人称代名詞使用傾向の分析」『東京国際大学論叢 人文・社会学研究』2, 1-20.
- Narita, M., Sato, C., & Sugiura, M. (2004). Connector usage in the English essay writing of Japanese EFL learners. *Proceedings of 4th International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC 2004)*, 1171-1174.
- 日本学生支援機構 (JASSO) (2019). 「平成 30 年度外国人留学生在籍状況調査結果」 https://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/intl_student_e/2018/index.html (2019 年 7 月 20 日アクセス)
- 大井恭子 (編) (2018). 『第二言語ライティング研究の現代的課題と解決のための将来構想—東アジアからの発信』平成 24~27 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)成果報告書.
- OWL (2020). Conjunctions and coordination. The Purdue Online Writing Lab. https://owl.purdue.edu/owl/english_as_a_second_language/esl_students/combining_sentences/conjunctions_and_coordination.html (2020 年 11 月 1 日アクセス)
- Ryshina-Pankova, M. (2006). Creating textual worlds in advanced learning writing: The role of complex theme. In H. Byrnes (Ed.), *Advanced language learning: The contribution of Halliday and Vygotsky* (pp. 164-183). London: Continuum.
- Ryshina-Pankova, M. & Byrnes, H. (2013). Writing as learning to know: Tracing knowledge construction in L2 German composition. *Journal of Second Language Writing*, 22, 179-197.
- 沢谷佑輔・鈴木智己 (2016). 「英語ライティングにおける結束性と評価の関係性—まとまりのあるライティングを目指した実践的研究—」『北海道英語教育学会紀要』15, 35-54.
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (2019). 『英語教育用語辞典 第3版』大修館書店.
- Taverniers, M. (2003). Grammatical metaphor in SFL: A historiography of the introduction and initial study of the term. In S. Vandenberg, A. Marie, M. Taverniers & L. Ravelli (Eds.) *Grammatical Metaphor: Views from systemic functional linguistics*. (pp. 5-33). Amsterdam: Benjamins.
- Watanabe, H. (2016). Genre analysis of writing tasks in Japanese university entrance examinations. *Language Testing in Asia*, 6. Retrieved from <https://doi.org/10.1186/s40468-016-0026-8>
- World Economic Forum (2016). Which countries are best at English as a second language?. World Economic Forum. Retrieved from <https://www.weforum.org/ag>

enda/2016/11/which-countries-are-best-at-english-as-a-second-language-4d24c8c8-6cf6-4067-a753-4c82b4bc865b/ (2019年8月15日アクセス)

保田幸子 (2014). 「英語力を高め、よりよい書き手を育てるために」『英語教育』63(4), 18-19.

Yasuda, S. (2014). Issues in teaching and learning EFL writing in East Asian contexts: The case of Japan. *Asian EFL Journal*, 16(4), 150-187.

Yasuda, S. (2019). Children's meaning-making choices in EFL writing: The use of cohesive devices and interpersonal resources. *System*, 85, 1-15.

保田幸子・大井恭子・板津木綿子 (2014). 「日本の高等教育における英語ライティング指導の実態調査 (Issues in teaching and learning EFL writing in higher education in Japan)」*JABAET Journal*, 18, 51-71.